
エンドロールが終わるまで

紫鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドロールが終わるまで

【Nコード】

N7329N

【作者名】

紫鬼

【あらすじ】

ある日交通事故で死んじゃった私が『死亡者管理事務局』とかよくわからない場所で自分が死亡したことを告げられる。

そこに乱入してきた“担当者”が、閻魔大王様の印鑑がなくなったと大慌てで乗り込んで来て、死亡者待合室がもういっぱいに入れないからちよつと転生してきてと言われる。印鑑が見つかり次第迎えに行きますからってお前ら勝手過ぎる！

しかし、結局は赤ん坊からやり直し。胸にある痣を“目印”に迎えに来ると言う担当者をボコボコにしてやると夢見て鍛え始めたが、

気付いたら世界最年少で軍人に…。しかもちよつといい地位。ツンデレの幼馴染みと一緒にワイワイやってたら問題発生。せ、セイ…え、なんだって？とにかくなんかスゴいやつが盗まれたらしい！よしエリー取り返しに行くぞ！なんて、なんだかんだ言ってやり直し人生を結構楽しんでた矢先に担当者のお迎えが…

そんな感じの物語。恋愛要素？たぶんあると思う。

00

うるさく鳴り響くクラクション。

突然きた強い衝撃。

友人の驚いた顔。

少しの浮遊感。

そして、地面に叩きつけられる感覚。

可愛い顔を涙と鼻水でグシャグシャにしながら駆け寄ってくる友人。

(…ああ、せつかくの可愛い顔が台無しになってるよ。せめて鼻水ぐらい我慢しようって…)

少しずつボヤけてくる視界。

目の端は真っ赤に染まっている。

(はは、凄い血だ…)

どこか他人事のように感じる感覚。

友人が目の前で叫んでいるが、全く聞こえない。
耳がやられてるらしい。

… ああ、なんだか眠くなってきた。数学の授業を受けてる並に眠い。

相変わらずぼろぼろと涙を流す友人を最後に見ながら、私の意識は
そこでフェードアウトした。

結論…どうやら私は死んでしまったらしい。

01 死亡者管理事務局

「初めまして、こちらは死亡者管理事務局です。担当者が来るまでしばらくお待ち下さい。」

「…はあ…?」

これはいったいどうしたものか。

意識が飛んだと思ったら次の瞬間、私は白いカウンター机を間にお姉さんと向かい合っていた。

お姉さんは、スラッとした黒いパンツスーツに身を包み、綺麗なブラチナブロンドを上の方でまとめている。

目は若干つり目だがキツイ印象はなく、眼鏡をかけているせいか、どちらかと言うとキリッとしたカッコいい感じに見えた。

こういう人を俗に「美人」と呼ぶのだろう。

無言で容赦なく眺めていてもお姉さんは動揺もせず、カウンターの横から書類を取り出した。

「担当者が来るまでと言ってはなんですが、少しここについての説明をさせていただきます。」

「はい」

「単刀直入に言うと、貴女は現世で死にました。」

… ああ、やっぱり。

「死亡原因は、ハンドルミスが引き起こしたことによる交通事故。打ち所が悪く、頭から血が多く流れたのが悪かったようですね。」

そりゃあ、あんなだけ流れてりゃ死ぬよね。

「そして、貴女のように死んでしまった人が来る所がここ、『死者管理事務局』です。」

「…えーと……それって、ここが天国ってことですか？」

お姉さんは首を軽く横に振る。

「いいえ、惜しいかもしれませんが、厳密に言うと違います。ここは閻魔大王様を筆頭に、死者の行き先を天国にするか、地獄にするかを決める所です。」

.....。

「…ま、マジですか？」

「マジです。」

ということ、と言ってお姉さんは手に持っていた2センチ近くある書類とボールペンを、私の目の前に差し出した。

「ちょ、多っ！」

「大丈夫です。記入欄は少ないですから。」

そういう問題じゃないよ、お姉さん。

諦めてボールペンを握り、書類に記入をしはじめた。
しかし、この厚みは頂けない…。

10分ぐらい経ったところだろうか、お姉さんのうしろ側から勢いよくドアの開く音が聞こえた。

「…担当者が来たようです。」

お姉さんが振り向くので、私も顔を上げて前を見た

慌てて来たのだろうか、黄色に近い髪の毛を持ったお兄さんは汗だくで、お姉さんに話しかける。

「ヤバイよヤバイ！閻魔様が印鑑無くしちゃった！」

「…またですか…」

え、印鑑？また？

全く話が見えない…て言うかこの人誰だ。あ、担当者か。

ボーンと見てるとお兄さんと目が合った。

「うわあ、やっぱり！もう次の子来たの！？」

「ええ。今書類を書いてもらってるところ。でも貴方が慌ててるってことは、もしかして待合室って…」

「いっぱいだよ！超満杯！仮眠室まで使ってるのにつ！」

「…どうでしょうか」

2対の目が私を見る。

「…ごめんねえ、閻魔様が大事な印鑑無くしちゃって、すぐに天国か地獄を決めれないんだ…
しかも最近戦争か紛争があつたみたいで、死亡者が馬鹿みたいに押し掛けて来たんだ…」

ぼつりと、酷く申し訳なさそうにお兄さんは話し掛けてきた。

「あ、いえ、無くしちゃったモンは仕方ないと言つか…」

「…うんうん、そうだよな。仕方ないよね。だってオレらのせいじゃないもんね」

「……………」

開き直りやがった。

「あ、書類書いてたんだ。」

「…はい」

そうだ、書きかけだったんだ私。

思い出して再びペンを走らせようとした。

「ああ、待つて待つて！」

ヒョイツと書類を取られる。

「あ、」

お兄さんは取った書類をシュレッダーにかけ、近くの別の棚から新しい書類を取り出して、私に渡した。

「はい、こっちの書類に書き直してくれない？」

「はあ、わかりました…」

私はいつたいなんの書類を渡されたんだ？

ペラリと表紙を捲る。厚さはさっきのとは違い、5枚程しかない。

中を見てみる。たいして変わった質問はない。

私はボールペンを持ち、記入欄を少しずつ埋めていく。

最後の1枚を残し、お兄さんに渡す。後は担当者の印鑑を押すだけだった。

お兄さんはポンッと、軽く印鑑を押し、書類を封筒に入れる。

しかし、封筒に書いてある文字を見て焦った。

「『転生者承諾書』？」

「え、ああ、そう！

本当はこれ、天国が一定人数を越えた時に使用する書類なんだけど、天国がいつぱいになる前にこっちがいつぱいになっちゃって。

仕方ないからさっきこっちくる前に上に確認取って、次の死亡者から使えるようにして来たんだ！」

お兄さんはえへへ、なんて笑ってるけど、私は笑えない。

「…ちょっと待って下さい」

「え、なに？」

「私今それに記入したんですけど…」

「うん、それで？」

お兄さんは、何か問題でも？と言う顔で聞いてくる。

「それで？じゃないですよ！

わ、

私でつきり違う場所に移される書類だと思ってたのに、転生って！」

「あれー、言って無かったっけ？」

「言って無いし、書類にも一切書いてありませんでしたよっ！」

「ええー…でももう印鑑押しちゃったし、次の死亡者って君からだし…」

「どうにかならないんですか！せめて私の次からとか！」

カウンター越しに私がお兄さんに掴み掛かろうしたら、お姉さんに

止められた。

「苛立つのはわかりますが、少し落ち着いて下さい。私が後で殴っておきますから。」

「——っ、全力のグーでお願いしますよ…!」

「はい、わかりました。」

すっかり頷くお姉さんのうしろで、お兄さんが信じられないとも言つように私たちを見た。

「でも、なぜ転生だけでそんなに怒られるんですか？」

普通はまた生きられると喜ぶ方もいらつしゃるのに…と、言つお姉さんの質問にフンツと鼻を鳴らして答える。

「そんなの面倒臭いからに決まってるじゃない!」

02 転生

「じゃあ、これ上に送っておきますね。」

あの後、結局私の反論は認められず、書類はシュレッダーの横を通って大切に保管された。

「心配しなくても大丈夫ですって！」

普通とは違って記憶も消さないし、目印も付けます。見つかり次第すぐにでも迎えに行きますし…

取り敢えず大丈夫ですって！」

まあ、産まれるとき痛いかも知れないけど…ってお前、小声でも聞こえてるぞ！

残念ながらこの数十分の間に担当者の信用度は私の中でほぼ0に等しくなった。

そして同時にお姉さんの信用度はうなぎ登りになるのだった。

「申し訳ないけど、諦めてちょうだい。転生先に不安があるならチート能力でも付けておくから。」

「…はい」

素直に諦めます。

て、あれ？

今気になった言葉が…

「あの、チート能力って…」

「ええ、まんまの意味ね。

身体能力なら足が速くなるし、目も良くなるわ。ジャンプ力だって上がってかなりの距離を跳べたり、腕力も上がるから成人男性なんて片手でヒョイよ。他にも、魔力が必要なら魔力が底無しになるし、貴女がその気になれば、本だって丸々一冊覚えられるわ。」

わあっすげえ！

「でも遠慮します。」

「あら、どうして？役に立つと思うけど…」

「だってほぼ人外じゃないですか。それに普段生活するのに大変そうです。」

我ながらちょっとアホいこと言ったなって思ったけど、お姉さんが楽しそうに笑ってたんでよしとした。

「あの、お話し中悪いんですけど…」

「なんですか？」

「準備、整いましたんで

——…どうぞ。」

「は

い　と続けて言う瞬間に、座っていたはずの椅子が消え、代わりに足元にポカリと穴が空いた。

ヤバい。　と思う前にその真っ暗闇に落っこちた。

「う、っわああああああー!!」

叫びながら落ちていると、上から「お気をつけて」と言うお姉さん

の声と「さよーならあー！」と元氣良く叫んだ担当者の声がやけによく聞こえてきた。

なんとなく担当者に苛立ちを感じた。

「おねえさん、さようならああああ！！
っ担当者あああ！！
てめえ覚えてろよおおお！！！」

次に会ったときは顔面にグーだかなあ！と上に向かって叫んだ。

「何でオレばかり…」としよげた声が聞こえたが、気のせいと言
う事にした。

穴は深く、どこまでも落ちていった。

暗かった。自分の手さえ見えないぐらい。

寂しいと、そう感じてしまっくらい独りだった。

気付いたら目を閉じて寝ていた。

私を包み込む暖かい腕が気持ち良かった。

腕のあまりの気持ち良さに泣いてしまった私がいた。ああ、こんな年にもなつて泣くなんて…

そんな私をあやす声が聞こえた。

優しい歌声。

この歌が子守唄だと、私が気付くのはもう少し後になってからだった。

02 転生（後書き）

初めまして、紫鬼です。

こんなへっぽこな話でも、楽しんで頂けたら幸いです。

更新は遅いですが、どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7329n/>

エンドロールが終わるまで

2010年10月21日20時15分発行